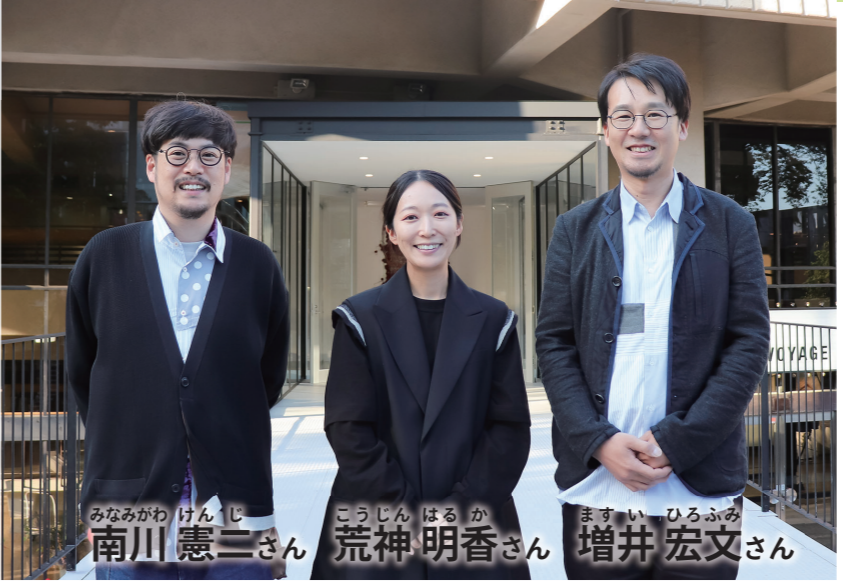


現代アートチーム 目[mé]

北本市内のアトリエを拠点に活動する、アーティストの荒神明香さん、ディレクターの南川憲二さん、作品を形にするインストーラーの増井宏文さんの3人を中心とした現代アートチーム。今年、さいたま国際芸術祭 2023 のディレクターを務める皆さんに、作品づくりと、芸術祭の見どころを伺いました。
主な作品: さいたまトリエンナーレ 2016 『Elemental Detection』 / TokyoTokyo FESTIVAL スペシャル 13 『まさゆめ』など。



みなみかわ けんじ 南川憲二さん
こうじん はるか 荒神明香さん
ますい ひろふみ 増井宏文さん

北本の縁
南川: もともと、僕と増井の2人と荒神は別の活動をしていたのですが、北本で以前行われていた「北本ビタミン」というアートプロジェクトがきっかけで密に関わるようになったんです。荒神の持つ独特な感性に触れて、ぜひ一緒にやりたい、と誘って結成しました。だから、目[mé]は北本で誕生したんですよ。チーム名は、荒神の「大事すぎで、皆が気づいていないことを名前にした」という話を聞いて、僕から「目はどう？」って提案しました。

目[mé]の作品づくり
南川: 僕たちの作品は荒神の「感性」がコアになっています。それに対して僕が見せ方を提案して、増井がそれを形にしていく、という役割ですね。
荒神: 市内の田んぼとか、住宅街を歩きながら考えるんです。北本というまちから、モチベーションとインスピレーションをもらっていますね。例えばですけど、小学生の頃に、空の圧倒的な広さを感じて「なんで空には人間は落ちないだろう」と感じて空には人間は落ちない出た、南川に話をするんですよ。
南川: 最初は意味が分からないんですけど(笑)、話を聞いて、実際に広い場所まで空に向かっていくと、ふと「あ、怖いかも」と感じる事があって。そういう荒神の「気づきや感性」に説得されて、どうやって作品にするかを考え始めます。コンセプトを決めたら、2人で増井にプレゼンするんです。増井は作る部分を担当しているので現実的な苦勞も考える立場なんです。僕たちのアイデアについても本気で向き合ってくれ

北本というまちが「何かやらないきゃ」というモチベーションをくれる

3人で納得いくまで対話を重ねて、「面白い」と信じたことを本気で形にする。それが彼のすごいところ。
例えば、無数の小さな時計をムクドリの子の群れのように配置した「movements」という作品があるんですが、まさに市内の公園でみたムクドリの子の群れからインスピレーションを受けて生まれたものなんです。
10年目の新たな挑戦、「ついたま国際芸術祭」をつくる
南川: 活動を始めてから10年目というのもあり、今までと違うことをやろうと思ったんです。目[mé]の作品主体ではなく、さいたま市さんと一から考えることで、今までと全く違う視点の芸術鑑賞の機会をつくらうとしていきます。この芸術祭を終えた時、自分たちがどう変わるのか、それも今回の目的のひとつだと思っています。
目[mé]が投げかける、「世界を「みる」という体験
南川: 僕たちが見せたいのは、世界というか、「そこにあるそのもの」なんです。今回、作った物なのか、作っていないのかをあえて曖昧にすることで、そのもの

公園を散歩するように、営みを「みる」ことを楽しんでほしい

Photo: SHIRATORI Kenji
さいたま国際芸術祭 2023
開催中~12月10日(日)まで
テーマ: 「わたしたち」
国内外のアーティストの作品や市民プロジェクトなど、多彩なプログラムを展開。世界をあらたな目でもう一度「みる」機会を創り出す。

を見るっていう行為が生まれると思っています。普段作品を見る時、「作品を理解しなきゃ」と構えて見ることが多いじゃないですか。今回はもっと気軽に、公園を散歩するような感じで見てもらいたいです。公園ってなにか作品があるわけじゃないけれど、鳥が飛んだとか、アメンボがつくる波紋とか、皆何かを見て「みて」いるじゃないですか。あんな風に、何かを準備している人、働いている人、作品を見ている人とか、いわゆる日常、人間の営みそのものを見る。そんなコンセプトで作っています。来場した人それぞれが、その時「みた」ことを楽しんでもらえたら嬉しいですね。



▲目[mé]がディレクションを手がける、さいたま国際芸術祭 2023 のメイン会場 (旧市民会館おおみや)

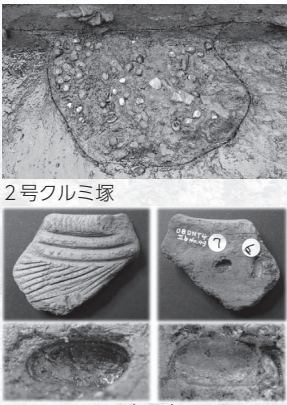
世紀の大発見! デーノタメ遺跡を読む

連載第3回 見えてきた植物利用

大宮台地の北部に位置する北本市は、とても遺跡の多いまち。人々は旧石器時代からこの地に暮らし、縄文時代には各所でムラが営まれました。中でもデーノタメ遺跡は全国に知られた縄文時代の遺跡です。全5回の連載で、国指定史跡を目指すこの遺跡の魅力に迫ります。
文化財保護課 (☎ 594-5566)

花粉は語る
デーノタメ遺跡の特徴である低地遺跡の魅力は、泥炭層の中に豊富な情報を残していることです。平成20年の調査では、まず土中の花粉を分析しました。その結果、縄文時代中期にムラが営まれると、低地にはクルミ林が、台地上にはクリやドングリの林が広がり、ウルシの栽培も行われていたようです。また、後期になると気候の寒冷化に伴い、トチノキ林が急速に拡大することもわかってきました。
花粉はムラの植生とその変化を明確に物語ってくれるのです。

クルミ塚の不思議
低地の調査では、さまざまな遺構が確認される中、特に注目されるのが貝塚ならぬクルミ塚です。クルミ塚は6か所点在し、そこで発見されたクルミ核(殻)の多くは人が石で



2号クルミ塚
土器についたダイズの圧痕

割ったものでした。明らかに縄文人が食べた痕跡です。また、クルミ塚の土を洗い出すと、ニワトコ・マタタビ属・クワ・ブドウ属など、多様なベリー類の種子を多く含んでいます。縄文人が酒やシロップを作っていた可能性がうかがえます。
このため、クルミ塚は縄文人の食や植物利用を知る上で、とても重要な情報源といえるのです。
縄文人のマメ栽培
クルミ塚のうち、2号クルミ塚では土器片を含んでいましたが、そのうちの一片には、なんとダイズの圧痕が認められました。長さは1.2センチで、ダイズの野生種であるツルマメの倍以上の大きさです。この圧痕は5千年前の関東で、ダイズを栽培していたことを証明する初めての事例(※)として新聞報道されました。
実は、クルミ塚では炭化したアズキの種子も複数見つかっています。もしかしたら、縄文人が納豆を食べていたかもしれないと考えると、何だか親しみがわいてきますね。

※野生種では見られない大きさで、栽培ダイズに近いサイズであることから、縄文人の手によりダイズの栽培が行われていたと考えられる。

ちよつとプレイ?
市民ギャラリー

「はじまり」
広原直子さん

「何みてる?」
原山千恵子さん

「大安吉日」
大島裕子さん

満点

「かげろう」
「蜉蝣」
工藤秀樹さん

せせらぎ短歌会

老いるとはこういうことか
今なれば 祖父母先人の心中を想う
重い戸の戸車替えて軽くなり
部品交換せめてわが身も
遅れまじ遅れまじとよゆうゆうと
先行き行く親を追うひな九羽
ウィークデーの日課となりし筋トレは
十分なれど成果嬉しむ
梅雨の晴れ間に現れしばさまは
今年還暦の洗濯好きなり

大塚 鶴子
下山 宏美
杉浦 寛子
成塚 伸子
米山 清美